

議 長	副議長	局 長	次 長	議事係長	議 事 係

予算特別委員会会議録 (2) (16.1定)			
日 時	平成16年3月5日(火)	開 議	午後 1時02分
		散 会	午後 2時33分
場 所	第2委員会室		
議 題	付 託 案 件		
出席委員	見楚谷委員長、北野副委員長、山田・横田・上野・森井・菊地 ・前田・武井・松本・斉藤(陽)・佐藤 各委員		
説 明 員	市長、助役、収入役、教育長、水道局長、総務・企画・財政・ 経済・市民・福祉・環境・土木・建築都市・港湾・学校教育・ 社会教育各部長、樽病事務局長、保健所長、消防長 ほか関係理事者		
別紙のとおり、会議の概要を記録する。 委員長 署名員 署名員 <div style="text-align: right; margin-top: 20px;"> 書 記 記録担当 </div>			

～ 会議の概要～

委員長

開会に先立ちまして、一言ごあいさつ申し上げます。

昨日の選挙におきまして、委員各位のご支持をいただき、委員長に就任させていただきました見楚谷でございます。今定例会において、各委員会に付託をされました新年度予算をはじめとする各案件につきましては、本市が直面しております財政危機克服に向け、例年にも増して重要な審議になるのではないかと考えております。

もとより微力ではございますが、副委員長ともども、公正にして円滑な委員会運営のため、最善の努力を尽くす所存でございますので、委員各位をはじめ、市長、理事者の皆様方のご協力をぜひお願いいたします。

なお、副委員長には北野委員が選出されておりますことをご報告申し上げます。

ただいまより、委員会を開きます。

本日の会議録署名員に、山田委員、森井委員をご指名いたします。

昨日開催されました理事会におきまして、別紙お手元に配布のとおり委員会日程が決定いたしましたことをご報告いたします。

付託案件を一括議題といたします。

お諮りいたします。

本日、当委員会において参考人の意見聴取を行うこととしたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

委員長

ご異議なしと認め、さように決定いたしました。

それでは、参考人の入場をお願いします。

(参考人入場)

委員長

この際、参考人の皆様に一言ごあいさつを申し上げます。

当予算特別委員長の見楚谷でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

本日は、当委員会にご出席いただき、まことにありがとうございます。限られた時間でございますが、皆様からの貴重なご意見を賜り、今後の当委員会の審議の参考とさせていただきたいと存じます。ご協力方よろしくお願い申し上げます。

それでは、当委員会の委員をご紹介申し上げます。

(北野副委員長以下、各委員を順次紹介)

委員長

続きまして、参考人の皆様をご紹介させていただきます。

(中島参考人以下、各参考人を順次紹介)

委員長

それでは、これより参考人からご意見をいただくことといたします。お名前をお呼びいたしましたら、順次中央の席でご発言をお願いいたします。

では、中島参考人、お願いいたします。

中島参考人

市内最上町に住む中島と申します。

それでは、早速始めさせていただきます。

このたび、小樽市は、財政難を理由に、各種の市民サービス削減、休止、廃止案を提起しています。マスコミ報

道でも、小樽市の19億円の赤字予算が大きな話題になり、市民の不安と不満が高まっています。問題は、なぜこんな事態になったのか、どのように解決していく方針なのか、市民に明らかにすることです。その点では、今回参考人として市民の意見を直接聞く機会を設けられたことは適切な対応だったと思い、発言の機会をいただいたことに感謝して、私は各種医療助成制度の改悪に反対し、ふれあいパスは現行制度存続を求めて、意見を述べさせていただきます。

65歳から69歳までの低所得者を対象とした老人医療助成と重度障害者、母子家庭、乳幼児の福祉医療助成制度は、今回の道議会の審議の結果で、第2回定例市議会に提案するとされています。北海道の基本方針は、老人医療制度は廃止、他の三つの制度については課税世帯対象に1割負担を導入するもので、福祉の大幅後退です。小樽市の計画は、これにさらに負担を追加するもので、道の改悪に拍車をかけるものです。

現在、小樽市の老人医療助成は、道の制度利用者が約1,400人、市の制度利用者が約100人、合わせて約1,500人が医療費3割負担のところ、低所得のために1割負担に軽減されています。北海道は、1年ごとに対象年齢を減らし、平成20年に制度廃止をする提案です。市の提案は、独自施策対象の100人を今年8月ですべて廃止して、3割負担にするという情け容赦のない中身です。今までの3倍の医療費が払えるでしょうか。払えないものは切り捨てるということになります。

現在68歳のAさんは、大腸がんになり、人工こう門をつけましたが、仕事ができなくなり、障害年金と妻のパート収入で生活、3割負担の外来通院ができず、治療をあきらめていた人です。しかし、老人医療助成の対象になり、再び通院できるようになりました。今回の市老廃止は再びAさんを3割負担に戻すことになるのです。市は、道に対して制度の継続を強く訴え、市の制度存続のために努力してください。たとえ、廃止になっても、低所得の老人に医療費負担を3倍に引き上げるのはひどすぎます。何らかの対策をとるべきではないでしょうか。

私たちは、長年、乳幼児医療費は小学校入学まで無料にしてほしいと取り組んできましたが、今回の道の方針では、小学校入学まで年齢拡大はするけれども、1割負担導入です。小樽市はさらに、これまで市が負担していた初診料、病院580円、歯科510円も打ち切り、すべて道に倣う方向です。これまで小樽では、5歳未満の子どもの医療費は無料でした。しかし、今度はすべて初診料がかかり、4歳以上の子どもの医療費は、市民税を払えない世帯を除いて1割負担、こういう大幅の改悪になるわけです。これまでの運動の成果が2歳分も後戻りです。これでは、子育て支援も少子化対策もなし、小樽市の人口増対策の放棄ではないでしょうか。小樽市は、ぜひとも現行の5歳未満まで無料を継続し、1割負担導入に反対してください。

道は、重度障害者や母子医療にも課税世帯に1割負担を導入するといいますが、わずかな収入増で課税されている世帯が多く、高額な収入がある人はほとんどいません。重度障害者は、定期的に通院、入院を必要とする人が多く、試算では人工透析患者は、これまで無料のところ月1万円を限度とする負担になり、在宅酸素療法患者は、無料から月9,500円の負担になります。いずれも治ることがない一生の医療費です。

現在、小樽市では、母子医療で母親が約1,500人、子どもが2,200人、重度障害では4,100人の方が医療助成を受けています。北海道の試算では、全体の約3割が課税対象になるとしていますが、困難な条件の中で就労しているのに、そのために負担増になれば、仕事をする意欲をなくすことにもなりかねません。弱い立場の人たちに、一番先に負担増を強いる必要があるのでしょうか。

石狩湾新港管理組合の議会を構成している議員は、それぞれ北海道、石狩市、小樽市の議会から議員報酬をもらい、さらに新港議会から月4万円もの報酬を得て、今年は海外視察に議員1人90万円、総額1,000万円もの計画をしています。北しりべし廃棄物処理広域連合議会は、北後志5か町村と小樽市で構成していますが、議員は議会日当たりの支給として経費削減に努めています。同様に改善して、税金の使い方を改め、福祉削減をやめるべきだと考えます。

次は、ふれあいパスです。

このたび、「小樽明るい革新市政をつくる会」の呼びかけで、私もふれあいパスの1回100円負担をやめて、現行どおり実行するための署名に取り組み、多くの市民の皆さんの声を聞いてきました。富岡に住む69歳の女性は、3月30日に70歳になるそうです。昨年、友達が次々70歳になってパスをもらってきましたが、「『あんたが3月の末にパスをもらったら、みんなで温泉に行こう』と言われ、楽しみにしていたのに」と残念そうでした。

ふれあいパスは、1997年から始まり8年目、お年寄りの最大の楽しみです。しかも、利用実態を聞くと、通院、買い物が多く、もう生活の一部になっています。小樽はバス1本では用が足りない。どうしても2車線乗ることが多い。家族の入院のための看病や見舞いの通院で助かっているという人も少なくありません。

3月2日の本会議場では、古沢議員が質問の中で例に出した79歳の老婦人が、じっと傍聴しておりました。2年前に脳出血で倒れ入院中の夫の食事介助のために、4時半を過ぎて席を立ちましたが、本日も傍聴席に来ています。年金と生活保護で生活しているこの方にとって、月1万2,000円の交通費を保障するふれあいパスは、生活費そのものであり、夫を介護する保障です。市長は、「低所得者だからといって対象外にはできない。所得状況を明らかにするのは困難なので、一律全員からもらおう」と言いました。市の財政が大変だから、パスの有料化は仕方ないという市民の中にも、収入の少ない人だけ無料にすべきだという意見は多く、月5万円程度の年金で暮らしているお年寄りこそ、その対象ではないでしょうか。例えば、市の生活保護受給者で70歳以上の方は約1,200人、介護保険料を減免になっている65歳以上の方は、約600人います。この方々にとって、パスの有料化は新たな負担増です。

本来、ふれあいパスは、生き生きした老後を推進するための生きがい対策です。すべての高齢者が利用して当たり前です。市は築港再開発事業として、JR築港駅舎は市税7億円を投入し、JRに無料で譲渡しました。お年寄りの無料は見直すのに、なぜJRには無料のままなのでしょうか。有料化して使用料をもらうべきだと思います。市民としては納得できません。多くの市民は、市も大変だから協力すべきと思っています。しかし、マイカルに多額の税金を投入して、2年半で破たん、当初計画した人口5,000人増どころか、毎年1,500人ずつの人口減、小樽活性化の起爆剤といいましたが、全国でただ一つの赤字予算都市ではありませんか。政策の失敗は明らかです。税金の使い道を間違っていたと反省もなく、市民サービス削減では、今後の立て直しも望めません。財政再建は市民の暮らしと営業を守ることを基本とすべきです。ふれあいパスの100円負担の導入はやめ、現行どおりの継続を強く求めて、私の発言を終わります。

委員長

ありがとうございました。

それでは、牧野参考人、お願いいたします。

牧野参考人

ただいまご紹介にあずかりました牧野でございます。

久しぶりに山田市長を拝見いたしまして、私は、第1回目の山田市長誕生のときのことを思い出します。それは、本当、呉越同舟選挙とも言うてもいいような選挙事務所の状態でした。私はお茶くみおばさんとして2週間、17日くらい、ずっと事務所に張りついておりまして、いったいどうなることかと思いました。でも、呉越同舟といっても、目的は一つ、山田市長を誕生させなければならないという。それで、最初はちぐはぐして、縦割りにはなっていましたけれども、横のつながりが全然とれていなかったのが、中盤になりましたら、本当にみんな一致団結して一つの輪になって、見事山田市長誕生。みんなで万歳して、そのときの喜びを私はたいへん貴重な経験をさせていただきました。そして今、私の後ろの方に座っていらっしゃる市長を見まして、この数年間、あれから数年たつて、今、この赤字財政に立たされている苦悩がありありと私の目の中に入ってきて、市はもちろん、市の職員はもちろん、それから我々市民も、今この大事なときに何ができるか。まず、一番心配なことは、もし小樽市がなくなってしまって、赤字再建団体、このようなことになった場合、今、それぞれの意見を述べていますけれども、そんなものはもう全然通用しなくなる、そこまでの危機に達しているということを、私たちはやはり感じなければなら

ないのではないかなと思います。

それと、ちょうどたまたまここに、今、意見を述べさせていただいている立場ですので、私はもう本当に思ったことが口から出てくるタイプなものですから、頭をよぎることは、小樽市に、今までかつてない初めてのことですけれども、与党の国会議員がいなくなったということで、小樽の市の財政は市会議員、市民、道の予算は道会議員がお金を持ってくる。国の予算、交付税とかそういう大きな小樽市の中の財政を助けてくれている、予算をもらってくるパイプとなるべき大事な国会議員、与党の国会議員が初めていなくなったという、これは私は、私自身、個人の考えですけれども、たいへんに残念なことであり、これからますます頑張らなくては、国からののが当てにできないなという、そういう感じを持たずにはられません。

それでは、私は、今回はふれあいパスの一部負担に賛成の立場という方で、意見を述べさせていただくことになっております。私も6年前までは、35年連れ添った夫がおりまして、3食昼寝つきのただの主婦でしたから、そんなに深刻にいろいろなことを考えなくてもよい状態にありましたけれども、やはり真剣に自分のことは自分でしなければならぬという立場に置かれましてから、このふれあいパスについても考えました。もちろん、女性の立場としましては、これは無料であってほしい、無料にこしたことはないです。それは、もう今までのとおり、もし無料にできるのであれば、こんな幸いなことはありませんが、でも今の場合は無理だと思います。

2月5日の広報おたるにも、わかりやすく市民1人当たりの一般会計の内訳というのが載ってまして、そのうちの頭から肩のところまでは、やはりいわゆる社会の福祉などに使っているお金の予算支出なのですね。それで、私、本当はもろ手を挙げて賛成するわけではないですけれども、この際、ふれあいパスは仕方がないのではないかなと思うのです。

というのは、平成9年は該当者は2万3,392人でした。そのときの小樽の人口は、15万5,460人でした。それで、小樽市が中央バスに払っていた税金は、1億4,400万円でした。それから、平成15年になりまして、受託するべき高齢者の数が2万8,567人になりました。小樽の人口は14万6,717人、つまり高齢者は5,170人増えて、人口は8,743人、逆に減っております。このような状態ですから、小樽にとって今、本当にバスは市民の足でありまして、その市民の足をバスという、バスも、しかも中央バスです。中央バスも、これは小樽市営バスではありませんから、これは民間企業の一つとしまして、営利を目的としているものだと思います。それで、もしこのふれあいパスの人も普通に200円をいただいたとしたら、収入が10億円だそうです。この10億円のうち、小樽市が15年度にお支払いしているのは2億円だそうです。8億円の赤字が中央バスで、中央バスも、これではとってやっつけていけないから、このふれあいパスを廃止したい。もし、もっと入れてくださらなければ、もうとってやっつけていけませんという、こういう意見も出ているということも、事実のことでございます。

それで、私、平成8年はどうだったのかと思ひまして、平成8年はどうだったかといいますと、1人当たり5,700円です。5,700円というのは、当時バス券が190円でしたから、190円の30枚ということは、1人に対して1日1回乗れるのです。それ1枚。あとは200円普通に出してバスに乗らなければならないという。それが平成8年までは、それですと来てたわけでした。だから、そういうことを思ひますと、今、窮地に立っているから、平成8年のときのことを思うと、もし100円になっても当時よりは2倍以上、確かにまだ100円になっても状況はいいということになります。そうしますと、100円になったとしたら1億5,000万円上乗せして、それを中央バスに払える。そういうことのようにございます。

今、先にご意見を述べられた方もおりますが、ふれあいパスにつきましては、いろいろです。確かに、本当に病気のために病院に通うのに往復4回乗り継いでバスに乗らなければならないという方もいます。また、70歳ということでバスをもらう権利があるので、仕方なくもらって、だから「無駄にするのもあれだから乗っているのよ」と言っている人もいます。それも本当のお話です。それから、本当にお買い物もしやすくなったり、無料であるために、たいへんバスをどんどん利用する。利用する方は1日に8回も9回も10回でも乗る方は乗る。乗らない方は乗

らない。それで、もし、これが有料化になった場合に、ああ、それだったら私は別にこれ、あってもなくてもいいけれども、もらっているという方の場合は、お金を出してまで受けなくてもいいわという方も恐らく何割かは出るのではないかと思います。

そういうことも踏まえまして、本当なら無料がいいに決まっていますけれども、私はやはり今回はしょうがないのではないかなという意味の賛成です。白か黒かどっちかにしなければなりませんから、そういう意味の賛成です。でも、こういう事態ですから、人件費の削減、それで市の職員の方々にも7パーセントの給与カットだとか、いろいろ市議員の方々、それから市長はじめ幹部の方々のそういう給料のカット、それも本当に身をもってしていただきたい。

それと、私思うのですけれども、未納の、まだ入ってこない税金、払われていない未納の税金もずいぶんあるのではないかと思うのです。そこら辺も徹底的に調べて、払う人は払う、払わない人は払わない。また、5年間ほっておけば、それが無効になるとか、そういうことのないように、細かくいろいろなことで神経を使って、この財政赤字を立て直していただきたい。そして、小樽市、今、観光都市として有名な小樽を、ぜひ小樽市を残しておいてほしいと思います。

一つ、無料の話で、スウェーデンのことがよく出されますけれども、スウェーデンのストックホルム、確かに社会福祉は、本当に老人でも女子、小さい子どもに対して、全部無料です。でも、そのかわりに消費税、税金は25パーセントです。必ず、どこかにすばらしいことがあっても、高い税金が加わっているということ。それに対して税金を払わない場合の罰則もまたすごいのです。だから、ただ無料無料と言っても、やはりその陰には必ずそういう税金の高さというものもありますし、一概には言えないと思います。

何か取りとめのない意見ではございましたけれども、私はふれあいパスの件は賛成という立場で意見を述べさせていただきました。ご静聴ありがとうございました。失礼いたします。

委員長

どうもありがとうございました。

それでは、続いて大野参考人、よろしくお願いします。

大野参考人

私は、保育料値上げ反対の立場で発言をします。

私は、民間保育所に勤めて31年目の保育士です。保育所は、言うまでもなく、共働きの家庭、母子家庭など、いろいろな理由で保育に欠ける子どもたちが生活する場所です。それで、これまでも保育料の値上げというのがありました。そのたびに保育所をやめたり、入所を断念する人がいたという話を聞いてきました。保育料が払えないから保育所に入れないというのは、私はおかしいと思います。

それで、前市長の時代、少子化対策として丸5年間は保育料は値上げされませんでした。そのおかげで家計に占める保育料の割合が下がって、保育所に入れる子どもが増えて、順番待ちが出る状態でした。そして、エンゼルプランでも、若者層の小樽への定着率を高めるために、保育料を国基準の60パーセントに抑えて、経済的負担を軽減していると言っています。

今回の値上げ案は、何で、どうしてという疑問が、その案を見るたびにでるのです。その一つは、3年連続で値上げしているということです。今まで、そんな3年間連続して値上げするといった市長はいなかったと、私は記憶しています。これは実際の経済的負担というのがありますが、それに加えて大きな精神的な負担を与えるものだと思います。それに上がり方も、1年目は上がるけれども、あとの2年は上がらないという階層もあれば、毎年3回とも上がるという階層もあるのです。そして、16年度に限っていえば、ただ一つ、D級階層というところだけは値下がります。

そして、さらにひどいのは、値上げの幅です。値上がりというのは、何パーセントというのが私は普通なのかな

というか、今までの例でいえば、そうだと記憶しています。ですが、今回の場合は、ほぼ一律3,000円という値上がりの仕方です。それで、値上げ率でいうと、3歳未満児、ゼロ歳児、1歳児、2歳児の最高金額、D12の5という階層があるのですが、そこは今6万7,970円が保育料です。これが案でいくと、7万970円で4.4パーセントの値上げ率になります。それが、市民税が所得割課税というC2の場合は1万1,060円から1万4,060円、同じ3,000円です。その場合27.1パーセントの値上げになります。そして、さらに市民税が均等割のC1という階層では、7,890円から1万890円に値上げで38パーセントの値上げです。そして、もっともっとひどいのは、市民税が非課税のB2という階層です。ここは980円、それが3,200円になりました。ということは、226.5パーセントの値上げ、226.5パーセントというのは、3.265倍になることです。もし、このD12の5、一番高い保育料のところをB2と同じ値上げ率だったら、保育料は22万円を超えます。また逆に、このB2の階層がD12の一番高い階層の4.4パーセントの引上げ率であれば、980円から1,020円でとどまるはずですが、そのB2、それからCの1、Cの2のこの高い値上げ率の階層の子どもたち、小樽市内の認可保育所に入っている子どもたちの約30パーセントが、その階層にいます。こんな弱い者いじめの値上げ案は、前代未聞だと思っています。とっても許されるものではないと思います。

例えば、夫婦、子ども2人、高校2年生と4歳の家庭ですが、夫婦の年収合計が430万円、中古住宅を買って6万円のローンを払っているそうです。単純計算をすると、1か月の生活費は30万円を切ります。その中で、D6階層2万2,890円を払っています。それが値上げされて2万5,890円になるということは、保育料が生活費の約1割を占めることになります。また、夫婦、子ども3人、小学校2年生と6歳、今度1年生に上がる子ども、それから1歳の子どもの預けている家庭では、手取りの給料が夫婦で21万円ぐらいだそうです。保育料は今、市民税非課税のB2の階層で2人で1,160円です。それが1人になっても値上げされれば3,200円になります。2人のときよりも1人の方が高くなる状態になります。そして、さらにもし学童保育に2人が行けば、おやつ代が2人分で3,000円で、利用料が2人分で4,000円、そうすると合計すると、その子どもたちにかかるお金が1万円を超えることになります。

また、今回のこの値上げの仕方というか、階層なのですが、今AからDの12の5までの21段階の階層に分かれているのですが、これを3年間連続して値上げする間に、29段階に細分化され、それがまた、3年後には17段階に減らされる。これはどういう意味になるのか。それで、今の税金の区分の階層、区分けは同じなのに、階層の名前が変わるのです。親にしてみれば、金額は値上がりするのだからというのもあるのですけれども、階層は自分たちでいえば、給料がそんなに変わらなければ同じ階層になると当然思いますよね。でも、税金の区分は変わらないけれども、階層の名称が変わるということは、今D2の人がD1という名称に変わる場合もあるわけです。ということは、保育料を払う保護者の目を何かごまかそうとしているとしか、私には思えません。

ちなみに、札幌の場合は、桂市長の時代まで毎年保育料を値上げてきました。それでも、小樽よりも安い保育料なのです。それで、今の上田市長になって値上げはしない、据置きという状態になっています。これは、いろいろ財政が大変ということはあるけれども、子どもたちはこれからの小樽を担っていく大事な子どもたちです。その子どもたちをどう育てていくのか、子どもを育てるのは保護者、それは当然です。でも、それとともに自治体はその責任を負うということも、児童福祉法に明確に示されています。だれもが安心して子どもを産んで育てていく、そういう環境があつてこそ、小樽市の人口も増えていくのではないかと思います。ぜひ保育料の値上げを取りやめていただきたいと思い、意見発表を終わります。

委員長

どうもありがとうございました。

それでは、木下参考人、よろしくお願いします。

木下参考人

木下でございます。よろしくお願いをいたします。

私は、親の代から、小樽の長橋で八十数年間今まで事業をやっております。まちづくりですとか、職人の会です

とか、たいへん日ごろ皆さん方にはお世話になっていることを、この場をかりてお礼を申し上げます。

私は、新年度予算に賛成という立場で意見を述べさせていただきたいと思います。たいへん厳しいこういう予算の中で、あちらを立てればこちらが立たず、非常に大変な状態だなというふうに思う。今のご意見を聞かせていただいても、やはりそうだな、うちも出さなければならぬのかなというふうに思いますけれども、入ってくるものがこの金額でありますから、中小企業、零細企業の場合は、入るをはかりて、いづるを制限するわけですが、市も同じことに入ってくる金額が限られているわけですので、それをどうやって配分するかということになると、大変なことだなと。市長の胃に穴があかなければいいなというふうに思っているのですけれども、ぜひお体を大切にさせていただきたいなと願っております。

ふれあいパスは、私も今日おやじに「どうだい、父さん。100円払わなければならないけれども、いいかい」と聞いたのですけれども、「仕方ないのではないか、こういうような状況では」ということを申しました。「やっぱりただというのはよくないよな」というようなことも、うちのおやじは82歳になるのですけれども、そう申しおりました。高齢医療の問題ですとか、放課後児童クラブの有料化とかという、いろいろな問題があると思いますけれども、入ってくるお金がこのような状態の中で、やむをえないのかなというふうに思います。ただ、入ってくるお金をもう少し稼ぐということ、我々企業ですと稼ぐということを考えるわけで、市の場合は稼ぐということもなかなか考えられないというふうには思うのですけれども、ごみの有料化とか、入るお金ももう少し早急に考えた方がよろしいのではないのかなというふうなことも考えています。

この新聞記事を見ますと、納税義務のある市民1人当たりの平均年収が450万円で、市の職員の方も7パーセント削減ということで620万円というふうに書いていますけれども、中小零細企業、又は商店主、いろいろ見ると、本当こんなに高くないのではないのかなというふうな気がするのです。まだまだ差はあるのではないかなというふうに思います。ただ、どんどん職員の給料をカットすればいいという問題では、たぶんないのではないかなというふうには思いますので、そのお金をぜひ市内で流通、還元をしていただきたいと思いますというふうに思います。

せんだって、帯広で森地茂さんという次期土木学会の会長のお話がありまして、道路の道東道の問題で話を聞いてきました。直轄とか新直轄とかという問題でもって、道路はいろいろな形でできるというふうに思いますけれども、帯広、十勝は、今、日本の中で穀物の供給基地として非常に重要な場所になっておりますから、道路の問題にしても、あんな1,000メートルの高地を、峠を越えていかなければならないようなところは、高速道路がたぶんできていくのではないかなというふうに思いますけれども、小樽もそうですけれども、もっと国にとって物すごく大事な場所であると、非常に大きな位置づけをアピールすることができるのであれば、国からお金を持ってくることもできるのではないかなと思います。先生たちに、これから小樽をいかにPRして、国のお金を持ってくるかということ、強く要望したいというふうに思います。ないお金は、もうしょうがない。持ってくるということをぜひお願いしたいなというふうに思います。

今日の新聞で、石狩湾新港管理組合の議会で小樽市の3名が視察を辞退したという、非常に賢明な選択であったのではないかなと思います。非常に小樽の名前を上げていただいたなと、本当にすばらしいことだなというふうに思います。こういうことがありますので、ぜひ市においてもこういうようなことを続けていただければなというふうに思っております。

我々中小企業、零細企業、又は商店主ですけれども、今、銀行の回収が急いで行われて、全然お金を貸してくれない、貸しはがしという部分が非常に多く起こっております。その中小零細企業に対して、いろいろな方策を行う形をお願いできればなというふうに思います。今までやったマイカルの問題は、もうこれはでき上がっております。そして、あそこでも多くの方が乗降して働いております。ですから、どっちがどうのこうのとかということではなくて、ぜひ全体を考えていただきたいと思います。この14万数千人の市民を2千数百人という職員がいかにして活性化して助けていくかということ、ぜひお考えいただきたいと思いますというふうに思っております。

最後になりますけれども、先ほどの方もおっしゃっていましたが、市の職員の方が3パーセント、5パーセント、7パーセントという削減をしていきますので、これは、ぜひ議員の先生たちも、それに上回るパーセンテージで削減をしていただければというふうに思いますので、このような財政難の折ですので、ぜひお考えいただいて、小樽のこれからの活性化のためにご尽力をいただけますことを祈念いたしまして、賛成の意見とさせていただきます。どうもありがとうございました。

委員長

どうもありがとうございました。

それでは、続きまして松本参考人、よろしくをお願いします。

松本参考人

松本でございます。よろしくお願いたします。

私は、ふれあいバス有料化反対の立場から意見陳述をいたします。

70歳以上のお年寄りにとって、ふれあいバスは本当にありがたい制度です。私自身、老人クラブに所属して、みんなからその声を聞いています。市は、有料化に当たり、「市長への手紙の大半が有料化を理解している。賛成の人が多い」と言っていますが、この三、四年間、「財政が大変だ。利用が予想以上に大きく、中央バスから助成を増やせと言われていた」となどの説明を、町内会や老人クラブなどの各種会議で繰り返してきたため、小樽市は貧乏だという観念と、だったら仕方ないから、市長の言うように一部有料化をして仕方がない。せめて制度を残してという善意とあきらめから風潮になっています。それが事実だと思います。しかし、「みんなが1回乗るごとに100円払うのなら、1車線で往復200円だから出かけなくなる」と既に本音が語られています。有料化になると、この制度の目的であった高齢者の社会参加は崩れていきます。高齢者を取り巻く今日の状況は、一昨年から医療費1割負担、全道でもトップクラスになった介護保険料は、0.9パーセントカットの年金をさらに引き下げています。そして、今年また、年金0.3パーセントになります。小樽市も、財政立て直しのためとあって、高齢者の敬老祝金も指圧マッサージの補助も廃止し、下水道料減免も縮小としています。生活全体に負担だけが広がって、のしかかっているのです。

年金生活者は、全国平均で年間240万円以下の年金の層が、年金受給者の62パーセントを占めていて、中でも180万円以下が41.1パーセントもいます。小樽市は、全国はおろか、全道と比較しても給料水準が低いまちですから、年金といっても低い層が圧倒的に多いと思われる。私の周りでも、月12万円から15万円で暮らしている老人夫婦やひとり暮らしで7万円から9万円で生活している人がたくさんいて、みんな切り詰めた生活をしています。医者への通院は、平成14年10月前の定額のと比べて、みんな行かなくなっています。

特に冬期間は灯油をいかに節約するかが生活の重大な問題になっています。灯油を節約するため、ポスフルや長崎屋、そして図書館などで何時間も過ごしています。2年前に有料化反対の署名をしたら、「これがあるから病院に行けるのだ。これにバス代もかかったらそう簡単には行けない。バスのおかげでまちに出てこられる」という声が寄せられました。また、「うちのおばあちゃんは、これで助かっているの。3万7,000円ほどの年金から病院行くのにさ」という40代の主婦もいました。

さて、市の説明を聞くと、100円の有料化で中央バスに5億円が入る。そして、市は、今までの2億円を1億5,000万円に切り下げるとのことですが、そもそも中央バスは札幌市の敬老バスに20年以上前から参加しています。小樽で実施したとき、空バスを走らせるぐらいならと同意したときに、利用状況など既に知り得ていたはず。何で10億円の要求に対して、一遍に市の1億5,000万円にお年寄りの負担、5億円を上乗せするのでしょうか。市は5,000万円節約できて、中央バスが5億円から増収になる。しかし、大半は少ない年金所得層のお年寄りにとって、1回100円の負担は、生活全体の中で100円ぐらいと言えない重みです。3月1日の市の広報は、今、市議会で審議されているものを決まったかのように報道する、町内会の回覧板に出てきていますが、このことに腹が立ちます。

私は、最後にこんな実例を述べたいと思います。83歳と84歳の老夫婦です。15万円のおじいちゃんの年金で食べ

ていますが、おじいちゃんは老健施設に入所していて、月5万5,000円の負担金と2万円ほどのお小遣いのほか、実費がかかっています。おばあちゃんは残ったお金で生活していますが、3年近くも老健施設に行くため、月1万円の家賃の支払にも大変です。本当に切り詰めて切り詰めての生活です。おじいちゃんはやっと歩ける状態で、声を出せるだけなのですが、毎日声だけの電話をかけているそうです。おばあちゃんは心配して、じいちゃんのところにほとんど毎日行っていますが、パスがあるから毎日行けるのです。また、先ほども言いましたが、おばあちゃんはじいちゃんのところに行っていて灯油を節約しているのです。こんなお年寄りが小樽にはたくさんいます。私の周りのお年寄りは、今までどおり無料パスを切実に願っています。有料化でお年寄りの足を奪うようなことをしないでほしいと思います。これまでどおり行っていただきたいとお願いいたします。よろしく申し上げます。

委員長

どうもありがとうございます。

それでは、次に青山参考人、よろしく申し上げます。

青山参考人

参考人として意見を述べさせていただき青山と申します。

2月の下旬といたしますが、24日から26日まで、北海道新聞の小樽版に「赤字予算危機小樽市財政」という、たいへんショッキングな記事が3回にわたって掲載されました。1回目は「忍び寄り倒産」、2回目は「福祉切捨て」、3回目は「残る聖域」というサブタイトルがついているとはいうものの、穏やかでないな、心なしか心配しておりました。そうした折、今回、小樽市の平成16年度の予算案について、一般の方より参考人として意見を聞きたいと、そういう情報をいただきましたので、自分が日ごろから考えているこの内容につきまして、議会の方に申込みをしましたところ、選考決定されたという議長からの通知をいただきまして、ありがとうございます。限られた時間ではございますが、私の意見を述べさせていただきます。さきに意見を述べた方々と多少重複する箇所があると思いますが、その辺はご了解いただきたいと思っております。

広報おたるの平成16年3月号を見ますと、財政健全化の中で新年度予算案について掲載されております。予算の概略では、総額で1,527億円余りで、その内容はもう既に掲載されて、皆さんご存じのとおりで省略いたしますけれども、3年連続で前年を下回る緊急型の厳しい予算、このように結論づけているようであります。その中で、一般会計の歳入では、長引く不況と人口減少から、市税収入が8億円余の減収、地方交付税の交付金、あるいは市立保育所運営費の補助金削減などで6億円余の減、歳入全体では17億円余りが減少となっているようであります。また、歳出面につきましては、退職者の不補充、給与の削減など人件費の抑制で約11億円の圧縮、後ほど私の意見も述べたいふれあいパス制度の見直しなどの事務事業の見直しで、約5億円余の歳出抑制ができたとのことであります。しかし、市の借金である市債の償還や、ごみ焼却場の建設負担金、港湾整備、国民健康保険などの特別会計や下水道事業会計への繰出金など、増加するものも多く、けっきょくは平成16年度の予算全体としては、約19億円の実質的な赤字予算案となり、その不足分を形式的には諸収入として計上するという、まことに変則的な事態になってしまったということでもあります。このことは、大変なニュースとしてマスコミ等でも取り上げられて、市民の一人としてたいへん寂しい思いをしております。

市の財政が苦境の中、市民の生活実態はどうかといえ、一般の民間企業におけるリストラのあらしはずさまじく、先日とも長年通いなれた職場からほうり出された中高年のサラリーマンが全く畑違いの職場で、あまりの緊張と過労により、体が動かせなくなって、救急車を呼んで担架で運ばれて、そのまま入院。せっかくの再就職の職場をやめざるをえなくなった例や、半年、1年と失業の状態が続き、家計のやりくりに行き詰まって、消費者金融の多重債務者となって、夫婦や子どもまでの名義で借金を重ねて、家族全体が破産者となったケース、また苦勞して手に入れたマイホームのローン返済に行き詰まって手放したケース、そこまでは行かないにしても、安いアルバイトで夫婦が早朝から深夜まで働き、体がもつだろうかと不安いっぱいの方々もこのような状態の中で、固定資産税や

自動車税の税金も滞りがちだという例もあります。

これらは、市民生活の実態として例外的なものではなくて、むしろこれが今、私の周りに起きている市民生活の日常茶飯事として繰り返されている実態と思われるわけでございます。市の財政が行き詰まっているのは、今述べた市民の苦しみの反映ではないかとも考えております。

山田市長も、施政方針の説明で予算執行の決意を披れきされているように、「安定的に持続可能な財政体質を構築し、スリムな組織とスリムな行政をつくり、何としても財政再建団体への転落を避ける」、このように述べて、そうならざるをえないのではないかと考えております。行政も市民も痛みを分かち合いながら、今抱える問題を避けることなく正面から受け止めて、それを乗り越えていくべきだし、関係者のご苦勞に思いをいたしながら、私は今回提案されているふれあいパスの受益者半額負担について、考えていることを述べてみたいと思います。

この制度は、それまでの回数券方式から平成9年度、小樽市議会すべての会派が賛成し、私が支援している公明党もそれを推進してきたと認識していますが、ふれあいパスの実現をこのとき見ました。少子高齢化の進行した小樽市としては、まことに時宜を得た制度であると思っていました。高齢者がゆえに閉じこもることなく、積極的に外に出て、元気に文化活動や健康増進、活発に動けるよう、その足を確保することでありました。また、そこから派生する経済効果も無視できないと思われていました。しかし、市の財政がひっ迫した中で、昨年来、近所を含めて実際に年配の方たちのお話合いの中から、このふれあいパスにつきましては、現状いろいろなそういう厳しい市の財政の話合いの中では、半額負担やむなしという声が私の周りでは多くなってきたようであります。また、私の友人がいる稚内市でも、平成14年度から半額負担に踏み切って、そこではやはり25パーセント程度利用者が減ったようであります。私たち小樽市でも半額の負担で利用する方たちは、3割ほど減るのではないかと予測しているようであります。それでは、バス事業者の営業状態はどう変わっていくのか。また、ふれあいパスを受給をされた方たちで、先ほども話が出ましたが、利用していない方たちはいないのかななどの情報も、もっともっと具体的に市民に知らせてほしいものであります。

小樽市は、今回のふれあいパスにつきまして、予算を増額できるのかといえば、今の状態ではそのようなことができる状態ではないのは、実感として先ほど来述べたとおりと感じますし、むしろ今回5,000万円余減額する予算案になっているようであります。何人かのこの関係者に伺ってみますと、実際に乗車された累計の乗車人数で計算してみると、これはバス事業者のデータであります。年間500万人余の方が利用していて、そして10億円とも言われている乗車料金、これを市としては平成13年度から2億円の予算を計上して支払われているようであります。それが精いっぱいだと。そうなりますと、バス事業者の側からすれば、8割引をしていたということになってしまうのではないかと判断しています。このような内容が聞こえてまいりますと、公共性の高いバス事業だからといって、その事業者にも8割引はあまりにもひどい、酷だなどの意見もうなずけるのであります。バス事業者は、事業の合理化や社員の賃金カットなど、大変な苦勞をされている実態をもお聞きするにつけ、このふれあいパス半額負担は、この制度をこれからも継続してほしい、その思いが強いからであります。

そうしますと、小樽市もバス事業者も、そして三方一両損という例えのごとく、やはり受益者にも応分の負担をお願いできないかということになり、私もまもなくふれあいパスの該当者になる今、この問題を提起されたことに思いをいたしまして、熟慮の末、私としては半額の受益者負担はやむなしの意見に賛成したいと考えております。

所得階層別の料金設定や、所得制限をつけてふれあいパスの給付をするなど、理論的には幾つかの方法も考えられると思いますが、でも実際は事務処理が煩雑になったり、人件費など逆に費用が発生することにもなって、市として負担の軽減にはならないと考えるからであります。結論として、ベストではないにしても、小樽市が財政再建団体に転落して、国の管理下に置かれ、元も子もない状態になるよりは、半額を負担していただくことが妥当だと考えるからであります。

半額の受益者負担は、福祉の後退、お年寄り虐待との意見もありますが、息子や娘の借金を親がどんなに責めて

も、追及しても、何の解決にもならない。支払とその原因の話合い、我が家でどうするか相談、それが市議会のしくみであれば、そこでの審議であると思います。与野党議員、全員で真剣な討議を私どもの方からお願いしたいわけでありまして。このふれあいパス制度は、該当者多数の方々は今なお評価しているようなので、市の財政に許される条件がついたときには、再度の無料化には期待しております。

山田市長は、「他都市よりもサービスの高い事業の縮小、廃止や、一部受益者へ負担をしていただくこともあるが、各施策の緊急度、優先度を見極め、少子化、地域経済活性化、さらに市民生活に密着した事業に配慮しながら、予算計上に努めた」このように説明しているようなので、今回の議会では、市長並びに市議会におかれましても、今後とも市民生活に密着した事業には、慎重な配慮を持って臨まれるよう、繊細かつ大胆な審議と姿勢を期待するものであります。

思いつくまま述べさせていただきました。議員の皆様には、なれない私の意見がご理解できなかった点もあおりと思いますが、発言の時間をちょうだいしたことに感謝し、以上で終わります。ありがとうございました。

委員長

どうもありがとうございます。

続きましては、松井参考人、よろしくをお願いします。

松井参考人

私は、桂岡に住む松井です。放課後児童クラブの有料化に反対の意見を述べます。

今年の春、子どもが小学校に上がりますので、児童クラブにお願いしたいと考えている者です。これまで自然の中での遊びや子ども同士のかかわりを大切にしてくれる保育園で伸び伸びと育てられましたので、学校へ行っても友達との触れ合いを大切にしたい放課後を過ごしてほしいと思っています。

私は、もともとずっと札幌に住んでいたのですが、この張碓にある保育園に通うようになって、山と海に囲まれた小樽の自然の中で子どもを育てたいと、強く思うようになりまして、昨年、思いきって小樽に家を建て、小樽市民になりました。自然環境はとってもいいと思いますし、このまま自然が大事にされることを望んでいます。ただ、学校へ行った子どもが、放課後どんなふうに過ごすのかと考えますと、札幌と比べてあまりにも児童館や公園が少ないということに不安も感じています。札幌や釧路、帯広は、校区ごとに近い割合で児童館があり、放課後、子どもたちが安全に過ごす場所は確保されていると聞きます。子どもたちが学校を離れたところでも、家庭に閉じこもることなく過ごせる場所があることは、親にとっても安心なことです。同時に、異年齢の子どもたちとの触れ合いの中で、社会性も育っていくことが保障されています。

小樽市では、児童館が3か所しかありません。働いていない親にとっても、放課後の子どもたちの過ごし方が心配です。ましてや、働く親は、子どもがどうしているのか、本当に心配でたまりません。放課後児童クラブの利用者は、子どもたちの2割にも満たないかもしれません。本来なら、どの子にも学校から帰ってからも生き生きと過ごせる場所が、行政の責任で保障されるべきではないでしょうか。なぜ、児童クラブの利用者が少ないのか、内容についてもクラブがつまらなくて、子どもが行きたがらなかったりとか、知り合いの中には苦労して共同クラブをつくってしまった人もいますが、子どもは困っていればいいというものではないので、その内容の充実や指導員の育成などに、もっと力を入れてほしいというのが、本当のところ親の要求なのですけれども、それどころか利用料の有料化、しかも今回はあまりにも高額です。これは、私たち親の願いとは全くかけ離れているものです。

私の周りには、2人、3人とか4人とか子どもがいて、上の子は放課後児童クラブ、下の子は保育園というようにそれぞれ預けている家庭もあります。今後、放課後児童クラブが有料化になったら、クラブの利用料、それにおやつ代、保育園の保育料と合わせると、月の支払がかなりの額になり、お給料の手取り額は減っているのに、子育て中の家庭には本当に重たい負担です。保育所、放課後児童クラブ、各種手数料の値上げなど、市役所の中での分野は別々かもしれませんが、利用する私たちの財布は一つなのです。小樽市の財政が厳しい状態にあることは、広

報などで盛んに知らされていることですが、まじめに働いて、まじめに税金を払っている私たちが、とんでもなく税金の無駄遣いをした覚えもありません。公債費がかさんでいるといいますが、そもそも借金の大きな原因となった築港再開発には、あまり縁のない生活をしている私たちが、財政の穴埋めをするというのは、本当に納得のいかない話です。

この放課後児童クラブは、放課後児童健全育成事業という名称で、「国と地方自治体が児童の育成に責任を負う」と定めている児童福祉法にはっきりと明記されています。この精神を生かしてほしいと思います。小樽では、これまでエンゼルプランの中で、若い人の定住を図りたいとの施策を掲げていました。説明会でクラブの利用時間が、これまでより延長されると聞いてありがたく思いました。でも、有料化はエンゼルプランの精神とは大きくかけ離れてしまいます。

今、通っている保育園は、豊かな自然の中での遊びや、子ども同士のかかわりの中でみずから育つということを大切にしているのですが、そういうものを求めて、札幌からも多くの子どもたちが通ってきています。私も「小樽いいよ。こっちに住めば」と言いたいのですけれども、「自然はいいのだけれども、行政がな」とってしまうのは、本当にもったいないと思います。これからも、自然豊かなこのまちをもっと好きになりたいですし、子育てのしやすい、住みたくなるようなまちにして、子どもを育てていきたいと思っている若い市民を応援する施策を、ぜひ続けてくださるようお願いしまして、私の意見を終わらせていただきます。ありがとうございました。

委員長

どうもありがとうございました。

それでは、会田参考人、お願いいたします。

会田参考人

私は、桜町に居住しております会田豊と申します。

今回、市の新年度予算案に対する意見を述べる機会を与えていただきました。私はいわゆる弱者と言われる市民に対しては、熟慮に熟慮を重ね、慎重な上にも慎重な審議が必要であると考えております。その上で、市民全体として考えたときには、赤字再建団体への転落は、何としても阻止、回避しなければならないと考えておまして、その意味で、提示されております予算案につきましては、やむをえない、賛成という立場で意見を申し上げたいと思います。

2月から3月にかけて、全国の自治体で新年度予算が審議をされております。小樽市も現在、市議会で慎重に審議をされております。数年前から、市の財政が危機的状況を迎えると聞き及んでおりましたが、それがいざ現実の問題として目の前に突きつけられますと、一市民としてやるせない気持ちと同時に、怒りにも似た気持ちがこみ上げてきております。私は、広報おたるに連載されておりますシリーズ財政再建は、必ず読んでおります。また、小樽市に限らず、多くの自治体の新年度予算に関する新聞報道にも、ほとんど目を通しております。新聞の見出しでは、どの自治体の予算も、超緊縮、厳しい、削減は限界、備蓄なし、住民への負担増などの活字であふれております。内容を見ますと、歳入がいずれも地方交付税の減、市税、町税、村税の減収によって歳入不足を見込んだ編成をせざるをえないという、うめき声が聞こえるほどの苦悩に満ちた表現ばかりです。小樽市は、ある新聞の社説にも登場するほどの事態になっています。「財源不足の19億円を入れる当てのない雑入として計上した。異例の事態だが、道内では第2、第3の小樽市が相次ぐ可能性がある」と指摘をしております。

小樽市が今日のような事態になぜ立ち至ったのか、その背景を考えることは重要なことだと考えております。バブル経済末期からの大型投資によるものだと批判があります。しかし、私は中には市民の長年にわたる要望にこたえた施設の建設等も含まれており、一概にその批判に賛同するものではありません。バブル経済が破たんした以降、政府は何ら有効な経済政策を行わなかったことによって、景気の低迷、不況が長期にわたって続いており、企業の倒産、リストラ、失業率の増大は一向に改善されず、加えて、現政権は構造改革と称して年金の改悪、医療費

の負担増をはじめ、国民に痛みだけを押しつけていることが、結果として自治体を苦しめることになっているというふうに思います。さらに、三位一体改革の名によって、地方財政改革を推進しようとしていますが、実質的な内容は、改革とは名ばかりで、専ら地方交付税の削減政策の強行であって、当然の帰結として自治体の財源不足が深刻化している、こういう状況にあると思います。私が、先ほど言いました怒りにも似た気持ちというのは、実はこのことを言っております。

ある新聞の社説では、「地方が納得できるものでなければ、地方財政改革の名に値しない。自治体の破たんが相次ぐような事態を、避ける工夫がぜひとも必要だ」とも述べられています。私も、この考え方には全く同感です。同時に、その社説では、「財務省が地方の財源不足に反論していることとあわせて、地方の立場に立つべき総務省のトップが、小樽市の赤字予算について、『首長の経営資質や才能、やり方が問われる時代』と述べた」というふうに記されております。みずからの責任はさておいて、このことは山田市長に対する侮辱のみならず、市長を選出した小樽市民をも愚ろうする無礼この上ないもので、とうてい許されない発言だと、私は思います。地方分権を進めると言いながら、地方を切り捨て、地方をないがしろにする本心が読み取れると思います。「もう一きを起こすしかない」という、道東のある町の幹部の声というのもありました。小樽市の幹部の皆さんも、同様の気持ちでおられるだろうと推察しております。我慢も限界に達しています。今の国の施策を変えさせるために、財政難に苦しむ圧倒的多くの自治体と協力して、具体的行動を起こすことが何よりも必要な時期に来ているのではないかというふうに、私は思います。

しかし、こんな状況の中でも、市の予算編成を放棄するわけにはいかないわけで、提案する側の苦悩は大変であったろうと思います。市の新年度予算案が実質赤字予算を組まざるをえなくなった点については、もろ手を挙げて賛成というわけにはいかないまでも、先に述べました要因からいって、交付税や補助金の減、交付金の減、そして市税の減少、補てん財源の減少など、歳入減が予想以上に大きくなったというのは、人口減や長期不況の影響、さらに国の新年度の財源穴埋めのための臨時財政対策債が大幅に縮減されて、地方交付税と合わせた削減幅は、対前年度比12パーセントということからいっても、理解を示さなければというふうに私は考えております。こうした状況下では、いかに歳入増を図っていくのか、見直しを図ることは避けられないことだというふうにも思います。見直しの視点が3点挙げられていると思いますが、現時点においては、これ以外の方途は考えにくいというふうにも思います。市民にとっては、事業の縮小や廃止、負担増となれば、反対あるいは何とかできないのかという声が大きくなるのは、至極当然のことです。

これまで他の参考人の方も多く触れられておりました有料化の一つに、ふれあいパス事業があります。私は、この事業の導入の経過や意義は、じゅうぶん承知しているつもりであります。道内でも高齢者の割合が高い小樽の状況を考えるとき、この事業の支出は年々増加の一途をたどることは明らかです。この事業を廃止するというのであれば話は別ですが、市民全体で難局を乗り切ろうという観点から、高齢者の皆さんににご協力をお願いすることは、私はいたし方ないというふうに考えます。ただ、先ほどの参考人の方のご意見にもありましたが、既に議会でも議論されているようですが、例えば所得制限を設定することも、私は方策の一つであるというふうに考えます。しかし、多くの労力と費用を要すると言われていたようですが、私は検討に値すると思いますので、ぜひ着手していただきたいものだというふうに考えております。

私は、教育に携わってきた関係上、また、教育への予算は未来への先行投資であるとの一貫した考え方を持っておりますので、どうしても教育関係の分野に目が行きがちです。その中で、私学振興補助金の問題が出されております。本市では削減してほしくない予算であります。私は、この際、現在行われている助成方法を改めて、生徒への直接助成にしてはいかかかというふうに提案をしたいと思います。直接助成の方が、より有効に活用できますし、市民の理解も得やすく、また私学振興にもつながるとの思いがあるからであります。

それから、放課後児童クラブの有料化や保育料の見直しなども、手をつけてもらいたくない予算であります。し

かし、万やむをえないとの結論に達するとしましても、金額設定や値上げ幅の圧縮に考慮していただきたいというふうに思います。最初に申し上げましたその他多くのいわゆる弱者に対する問題も、熟慮に熟慮を重ねていただければというふうに思います。

最後になりますが、申し上げたいことがあります。それは、自治体の財政が厳しくなると、小樽市に限らず、真っ先に削減の対象となるのは、職員の給与と職員数です。小樽市の場合、2004年度から3年間で職員の基本給を7パーセント削減する合理化案に合意した。道内の市では最大の削減幅との報道がありました。組合側は、「極めて厳しい内容だが、財政健全化に協力するため、身を切る思いで妥結した」とのコメントもありました。ところが、今年になって、根室市が10パーセント方針を打ち出すと、小樽市では見直しのふじゅうぶんさが指摘される支出もあるとして、職員の給与をもっと削減せよと言わんばかりの報道がありました。市職員の給与費削減は、基本給にとどまらず、調整手当の廃止、退職手当の削減、55歳の昇級停止、特勤手当の削減もあり、このことを市民の皆さんにきちんと示して理解してもらうことは、非常に大切なことだというふうに思います。

管理職手当の削減は以前から実施されておりますし、さらに減額率の拡大も行われるというふうに聞いております。直近では、特別職と教育長の給与の減額率が拡大されることも報ぜられました。給与は働く者にとって重要な労働条件であります。見直しふじゅうぶんというのは、いったいどれだけ削減すればじゅうぶんというのか、私には理解できません。国や道の公務員の給与は、人事院勧告や人事委員会の勧告によって大方は決められます。ここ2年は連続してマイナス勧告が出され、年収も大幅に減っております。市の職員も人事院や人事委員会の勧告に準じていると思いますので、間違いなく年収減になっていきます。私は、身を切る思いで妥結したという組合の姿勢に感謝こそすれ、これ以上の削減を求めるのは、酷な話だというふうに思います。また、職員数は退職者不補充で実質的に減員されておりますし、さらに5年間で140名程度の削減を検討中と聞いております。ただ、削減だけを念頭に置く余り、業務の停滞や市民サービスの低下につながることはないように、じゅうぶん配慮していくことが必要だというふうに思います。

いずれにいたしましても、小樽市の財政は危機的状況にあって、特に向こう3年間で赤字再建団体へ転落するかどうかの分岐点であることだけは、紛れもない事実であります。何としても赤字再建団体への転落を回避するためには、市民全体の協力が不可欠であります。市議会におかれましては、慎重にかつじゅうにぶんに議論を尽くしていただきたいと思います。また、議決された後、歳入の状況や歳出の執行状況は、限度はありましようが、これまで以上に、きめ細かく市民に明らかにすることが、何よりも重要なことだというふうに思っております。

具体面での意見としては、いささか少ない、あるいは浅いという嫌いはありますが、以上で私の賛成の立場での発言を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

委員長

どうもありがとうございました。

ただいま参考人のそれぞれの皆さん方から、貴重なご意見を拝聴させていただきました。

それでは、参考人の方々にお聞きしたいことがある委員はいらっしゃいますか。

(「なし」と呼ぶ者あり)

委員長

よろしいですか。

それでは、ご意見の聴取をこれで終了させていただきたいと思います。参考人の皆さん方におかれましては、長時間にわたり、本当にご協力ありがとうございました。どうぞご退席いただきたいと思います。

(参考人退席)

委員長

以上をもって、参考人からの意見聴取を終結し、本日はこれをもって散会いたします。